

2001年6月17日

## 主よお話しください、僕(しもべ)は聞いております

### ～ 父の日礼拝 ～

【聖書】サムエルへの主の呼びかけ(サムエル記上3章1～18節)

3:1 少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。 3:2 ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすんできて、見えなくなっていた。 3:3 まだ神のともし火は消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。 3:4 主はサムエルを呼ばれた。サムエルは、「ここにいます」と答えて、3:5 エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかし、エリが、「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」と言ったので、サムエルは戻って寝た。 3:6 主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。 3:7 サムエルはまだ主を知らなかったし、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。 3:8 主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、3:9 サムエルに言った。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って元の場所に寝た。 3:10 主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」 3:11 主はサムエルに言われた。「見よ、わたしは、イスラエルに一つのことを行おう。それを聞く者は皆、両耳が鳴るだろう。 3:12 その日わたしは、エリの家にご報告したことをすべて、初めから終わりまでエリに対して行おう。 3:13 わたしはエリに告げ知らせた。息子たちが神を汚す行為をしていると知っていながら、とがめなかった罪のために、エリの家をとこしえに裁く、と。 3:14 わたしはエリの家について誓った。エリの家は、いけにえによっても献げ物によってもとこしえに贖われることはない。」 3:15 サムエルは朝まで眠って、それから主の家の扉を開いた。サムエルはエリにこのお告げを伝えるのを恐れた。 3:16 エリはサムエルを呼んで言った。「わが子、サムエルよ。」サムエルは答えた。「ここにいます。」 3:17 エリは言った。「お前に何が語られたのか。わたしに隠してはいけない。お前に語られた言葉を一つでも隠すなら、神が幾重にもお前を罰してくださるように。」 3:18 サムエルは一部始終を話し、隠し立てをしなかった。エリは言った。「それを話されたのは主だ。主が御目にかなうとおりに行われるように。」

### 【序】 パパの手紙

今日は父の日礼拝ですので、先ず一人のお父さんの手紙をご紹介します。「ねえ、パパが子どもの時は、神さまのことをどう考えていたの？ いつでもちゃんと信じていたの？」という質問への返事です(ダニエル テイラー「父から子どもたちへの29の手紙」)。

パパのお父さん(君たちのダレルおじいちゃん)は、バプテスト教会の牧師だった。パパは5才のある日曜日、父の説教を聞いていて「自分は罪人だ」と感じた。悪いことをしかねないだけではなく、実際に自分は悪いことをしているのだと感じた。礼拝が終わると、父が講壇から下りて、私たち三人

の子どものところに来た。父に話しかけられて私は泣きだした。父は私たちのために祈ってくれ、私はぐっと気持ちがよくなるのを感じた。

9才の時、夜の礼拝で父の説教を聞いていた。話の内容は覚えていないけれども、その説教が心に重くのしかかったのだけはよく覚えている。自分が神さまから遠く離れている、なんとかしなければと思った。説教が終わり、牧師である父が(祈りを求める人は前に進み出るようにと)招きをした。私は心にのしかかるレンガが除かれることを願った。

会衆が賛美歌を歌っている時に、前にふみ出した。最初の一步はコンクリートの靴を履いて泥沼を歩き出すような感じだった。けれども二歩目は羽の如く軽やかだった。重くのしかかっていたレンガはどこかへ消え去っていった。前に出た私と握手をする時、君たちのおじいちゃんの目に涙が浮かんでいたのを、今でも覚えているよ。

このようにして、神さまは毎日の生活に欠かせないお方になった。私が沢山祈ったとか、聖書をいっぱい読んだからということではなく、いつの間にか、神さまがいつも私と共にいてくださるという意識が身に着いたのだった。

単語のテストでカンニングしたい誘惑にかられた時にも、神さまはそばにいてくださった。怪獣が寝ている時にパジャマを引きちぎって、噛みついてくるのではないかと怖くなった時にも、神さまはそばにいてくださった。デビーはなぜ白血病で死んだんだろうと悩み始めた時にも、神さまはそばにいてくださった。

大きくなると、神さまについて沢山の疑問を持つようになった。神さまにたてつきたくなるようなこともあった。そもそも神さまなんかいないんじゃないかと思ったこともある。神さま抜きにこの世界のことを説明できるんじゃないかと考えたこともある。だけれども、そんな時だって神さまはちゃんとそばにいてくださったんだよ。

神さまは「そばにいる」だけじゃなくて、私たちにもっとかかわりたいと望んでおられる。みんなの知性や心に語りかけたいと願っておられる。多分ひとり一人の耳にだって直接話かけたいと願っておられる。神さまは私たちが愛し、赦そうとしておられることを、みんなに知ってほしいと願っておられるし、人はどう生きてらいいのかを教えたいと望んでおられる。

「救われる」とは、毎日繰り返される自分たちの生活の中に、神さまに入ってきていただくことなんだろうとパパは思っている。神さま抜きの人生とは「まったく違う人生」を送ることだ。私はそういう人生を送ってきたと思う。君たちにもそのようにして生きてほしいとパパは心から望んでいる。

愛をこめて　パパより

## (1) 神の語りかけをきちんと聞く

日本の教会や幼稚園には、幼児のサムエルがお祈りの姿勢で神さまを見上げている可愛い絵がよく掲げられています。母親のハンナは乳離れするまでサムエルを手もとに置いて心をこめて育てました。それから祭司エリのもとに連れて行き、「この子を一生神さまにお貸しします」と言って託したのです。3才か4才頃だったかもしれません。

でもサムエルが「主よ、お話ください。僕(しもべ)は聞いております」と言って、神さまのお声を直接聞いたのは、もう12才を過ぎた頃ではないでしょうか。エリは目がかすんで見えなくなっているほど年とっています。またサムエルは、夜の間神のともし火が灯されている神殿の一室に一人で寝ています。今ご紹介した父親テイラーさんは、9才過ぎても夜怪獣に怯えていたのですから、やはり中学生になった頃と考えるのが当たっているでしょう。

イエスキリストも12才の時、一家で都詣をした後、両親から離れてひとり神殿に留り、学者たちの話を聞いたり、立派に受け答えして皆に驚かれています。12～13才とは宗教的にしっかり自立できる時なのですね。ユダヤ教徒はこの時成人式を受けて、神の律法について一人前の義務を負い始めるそうです。

さて少年サムエルは神殿の一室で寝ていました。「神のともし火が消えておらず」とありますから、もうだいぶ燃え続けてきた夜明けも近い頃でしょう。彼は自分の名を呼ぶ声を聞きました。目の不自由なエリ先生が何かしてほしいとお呼びなのだと思ったサムエルは、「ここにいます」と言って、エリのもとに走って行きました。「お呼びになったので参りました」「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」

部屋に戻って寝たサムエルは、また自分の名を呼ぶ声を聞きます。すぐエリのもとに行きました。「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」。戻ってやすむと、また同じことが起こりました。サムエルは神さまが直接彼に語りかけるなど、考えてもみなかったのです。しかしエリはサムエルを三度も呼んだのが神さまご自身であると悟りました。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、“主よ、お話ください。僕(しもべ)は聞いております。”と言いなさい」。サムエルはまた呼ばれました。今度はエリの指示に従って正しく対応できました。「どうぞお話ください。僕は聞いております」。この時の場面を聖書はこう記しています。「主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた」。

サムエルが神さまに向かって、聞く姿勢をきちんととった時に、神さまも来てそこに立って、親しく語りかけてくださったのです。私たちも神さまから呼びかけられているのに、方向違いの他の人のもとにとんで行って、肝心の神さまに聞かないでばかりいるのではないのでしょうか。

先ほどの父親テイラーさんは、小さい時から礼拝に出席しているうちに、自分の心を見つめて深く反省する感性が養われたこと、そして神さまがいつも私と共にいてくださると言う意識が身に着くよ

うになったと語っています。その上で神さまは「そばにいる」だけではなく、私たちの知性や心に語りかけたいと願っておられる、私たちを愛し、赦そうとしておられることを知ってほしい、多分ひとり一人の耳にだって直接話かけたいと願っておられると、わが子に語りかけています。なんと素晴らしいお父さんでしょう。

サムエルも母の信仰によって、神殿に仕えるエリのもとで小さい時から育てられました。神さまがいつも共にいてくださると言う意識は十分に身についたことでしょう。しかし語りかけてもっと深い交わりをもとうとしておられる神さまについては、まだ知りませんでした。「主よ、お話ください。僕は聞いております」。こんな素晴らしい言葉とともに、神さまにきちんと聞く姿勢を教えることが出来たエリは、サムエルに対して父親の役割を見事に果たしています。

## [2] 神の語りかけを聞き漏らす原因

さてエリから聞く姿勢を教えられて、サムエルが聞いた神さまの言葉は、こともあろうにエリの家に対する裁きの知らせでした。ならず者の息子たちが神殿で神を汚しているのに、父親として咎めなかった罪のためです。それを聞く者は皆、両耳が鳴るとありますが、これは特にサムエルにとって、耳につらい言葉でした。エリ先生にとっても言えません。彼は報告できずにいました。このような厳しい言葉は本人のエリに直接おっしゃるべきです。どうして神さまはそうならなかったのでしょうか。

前回のメッセージで申し上げましたように、エリは自分の二人の息子たちの悪い評判を聞いて、叱っています。でも聞き流されてしまうと、それ以上のことが出来ませんでした。そこで神さまは「神の人」と呼ばれる使者を送って、エリに神さまの裁きを伝えておられます。エリは息子たちに祭司を辞めさせるべきでした。しかしそれもしていません。祭司は親から子へと引き継がれていくものだという伝統に縛られて、より良い道を自由に選ぶとすることができないのです。神さまのお心にかなう事を大胆に決断するところに、信仰の証があるはずですが、でもエリにはそれが出来ませんでした。そして神さまから「あなたはなぜ、自分の息子をわたしよりも大事にするのか」と言われています。

ここにエリが神さまの声を直接に聞けなかった原因があったのでしょうか。神さまの語りかけを聞きなさいと少年サムエルに教えることが出来ながら、自分はこの世のしきたりや親子の情に引きずられて、神さまの声に聞き従えない彼の優柔不断さが、自分に対する神さまの語りかけを聞き漏らす結果になったのではないのでしょうか。

私もよく相談を受けます。私のところに来る前に、既にいろいろな意見を聞いておられるでしょうから、私の意見もその一つでしかありません。結局はそのどれに従うかは、ご本人の決断にかかっています。ですから、どれが神の御心かをよく祈ってお決めくださいと申し上げます。でも時として、既に結論を心に持ちながら相談に来る方がいます。これは自分の判断に賛成してもらって、安心したいためのもので、相談ではありません。

私たちはこれと同じことを、神さまに対してもしています。サムエルは「主よ、お話ください。僕は

聞いております」と神さまに申し上げました。でも私たちは「主よ、お聞きください。私が話しています」と祈っている場合の方が多ようです。自分の我を通そうとしている限り、神さまの語りかけは聞こえてきません。結局私たちが神さまを沈黙させているのです。

### [結] エリの謙虚さ、サムエルの素直さ

次の朝サムエルがためらっていると、エリに呼ばれて「神さまから何を語られたかを隠さずに言うように」といわれます。サムエルは決心して、神さまのお言葉を全部話しました。それを聞いたエリは「それを話されたのは主だ。主が御目にかなうとおりに行われるように」と言いました。これはまた何と素直な言葉でしょう。

エリは目がかすんできて見えなくなるほどの老人です。相手は12～13才の少年です。しかも大祭司である自分に対する厳しい言葉です。何を生意気など叱り飛ばすほうが普通です。そしてサムエルはちじみ上がって自信を失ったことでしょう。ところが年とった大先生が子どもの前で実に謙虚です。私もこのような謙虚さを、いつ迄も持ち続けたいと心から願っています。これは神さまの前に身を置く者にして、はじめて持てる謙虚さです。さすが神殿で神さまに仕え続けてきた人ですね。

こうしてエリは、少年サムエルに、聞く姿勢をもって神さまと対座するならば、神さまの語りかけをきちんと聞くことができることと、聞いたら臆せずにはっきりと語らなければいけないことを教えたのでした。

皆さん。私たちは子どもからきびしく批判された時に、エリのような態度をとれるでしょうか。養ってもらいながら何を言うかと威張っていては、父親失格です。子どもは離反していくばかりです。世の父たる者は皆、神さまの前に身を置くことを心がけなければなりません。わが子からも喜んで神さまの言葉を聞こうとし続けなければなりません。

サムエルは、年をとって不自由になっていくエリのそばから離れることが出来なかったでしょうし、エリも彼を放さなかったに違いありません。ですから神殿で多くの時を過しました。そして神さまを身近に覚える心が養われていきました。私たちも子どもをしょっちゅう教会に連れてきて育てたいものです。ことに礼拝で、心から喜んで賛美歌を歌い、献金し、心を注いで祈り、真剣にみ言葉を聞こうとする大人たちの姿に接するようにしたいものです。子どもたちは全身で信仰を受けとめていくでしょう。

エリは「主よ、お話しください。僕は聞いております」と言う大切な言葉をサムエルに教えました。自分は良く出来ていないから教えられないと、逃げてはいけません。エリも自分の子どもには良く出来ませんでした。でもサムエルにはちゃんと教えました。私たちも、たとえ自分は駄目であっても、わが子の前にその駄目さをさらしつつ、大切なことはきちんと教えていきましょう。親も子も罪深いと言う点では、同じなのですから。

最後に子どもたちへ。同じエリに育てられながら、息子たちとサムエルとどうしてこうも違ってしまったのでしょうか。サムエルは夜中に呼ばれた時、エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言っています。しかも三度も同じことを繰り返しています。皆さんは、朝起こされた時に「はい」と言ってすぐ起きますか。夜中に呼ばれたら、三度目には布団をかぶって、聞こえない振りをして眠ってしまいませんか。その上サムエルはエリから言われたら、その通りに聞き従っています。なんと素直でしょう。

エリの息子たちは「父の声に耳を貸そうとしなかった」(2:25)とあります。父の言葉に素直に聞き従うかどうか、分かれ道だったことがわかります。「子供たち、主に結ばれている者として両親に従い(聞き従う)なさい。それは正しいことです。父と母を敬いなさい。これは約束を伴う最初の掟です。そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる」(エフェソ6:1～3)。

父の日は私たちに、父としてまた子としての在り方を深く反省させてくれる日です。